

京都企業は世界を意識してきた

川 北 英 隆 CMA

目 次

- | | |
|---------------|---------------------|
| 1 はじめに | 4 京都企業（製造業）の定量的特徴 |
| 2 京都の上場企業の概観 | 5 まとめ：京都企業に対する投資収益率 |
| 3 京都企業の定性的な特徴 | |

京都企業は他の上場企業と異なっている。その定性的な特徴は、文化の伝承、オリジナリティの追求とその延長線上にあるグローバルな経営意識、技術志向クラスターの形成の3つにある。定量的な特徴は、グローバルな事業展開が顕著である。また、足元のROAは他の上場企業より少し低いものの、売上高営業利益率は高い。京都企業の投資収益率を計測すると、平均値は他の上場企業に少し劣後するものの、標準偏差が小さく、投資における当たり外れの少なさが抽出できた。

1 はじめに

京都で働き、生活していると、京都の街の元気に気づく。地方の県庁所在地はもちろんのこと、隣の大阪と比べても、格段に京都の方が元気だと感じてしまう。たんに観光客が多いだけでなく、学生があふれているだけでもない。一方、株式市場では、京都企業の元気を指摘する声も多い。京都の元気さには、この京都企業の効果もあるのだろうか。

そこで本稿では、京都企業（主に上場企業）に焦点を当てつつ、それが京都という地域の特徴と関係を持っているのかどうかについて、調査と分析を行った結果を示しておきたい。本稿のそもそもの目的は、元気だと感じられる京都企業への理解を深めることにより、日本の多くの企業が東京という一極にこだわることにどの程度の意味があるのかを探り、今後の日本企業と株式投資のあり方に関して何らかの示唆を得ることである。

以下、本稿の構成は次のとおりである。



川北 英隆（かわきた ひでたか）

京都大学大学院経営管理研究部教授、京都大学博士（経済学）。
京都大学経済学部卒業、日本生命保険相互会社資金証券部長、同社取締役財務企画部長、中央大学国際会計研究科特任教授、同志社大学政策学部教授等を経て現職。現在、本誌編集委員会委員長、日本価値創造ERM学会会長、日本ファイナンス学会理事等を兼ねる。
主な著書に、『「市場」ではなく「企業」を買う株式投資』金融財政事情研究会、『証券化—新たな使命とリスクの検証』金融財政事情研究会、『日本型株式市場の構造変化』東洋経済新報社等。